

## 陶器千塚古墳群出土の胡籬金具

同志社大学 大学院博士課程後期

松田 度

大阪府堺市の東南部、泉北丘陵の北端に位置する陶器千塚古墳群は、古墳時代後期の古墳群であり、この地域では古くからその存在が知られていた。しかし相次ぐ開墾や、戦後の土地造成のため、その大半が姿を消し、現在10数基の古墳が残されているのみである。1955年(昭和30年)には、泉ヶ丘東中学校の建設に伴い、その敷地内にあった5基の古墳が姿を消した。そのうちの2基(21・23号墳)については森浩一氏による発掘調査が行なわれたが、他の3基(11・22・24号墳)は、実態不明のままブルドーザーの削平を受け破壊された。その際、森氏が11号墳から採集されたのが、今回紹介する資料である。

これはその形態から胡籬の吊手に付属する飾金具の一部と考えられる。先端より長さ6.8cm、重量5.9gが残存し、最大幅2.65cm、最大厚0.15cmを測る。表面には蹴り彫り技法による波状列点文、鍍金の痕跡と、繊維の付着が観察できる。鋌頭は4か所に残り、その径のサイズはほぼ0.4で統一されている。中央の鋌を省略し、先端部の両隅に鋌が配されるタイプのものである。個体差の大きいこの飾金具のなかで、類例は奈良県桜井市珠城山1号墳出土資料に求められる。その年代観については、中央の鋌が省略されるという点も考慮し、この種の金具がもっとも多様化する頃、すなわち古墳時代後期後半代(以下、古墳時代を省略)のものである可能性が高い。これは、先述の珠城山1号墳が後期中頃から後半の時期に位置づけられることと矛盾しない。しかし、上記の内容もさることながら、この

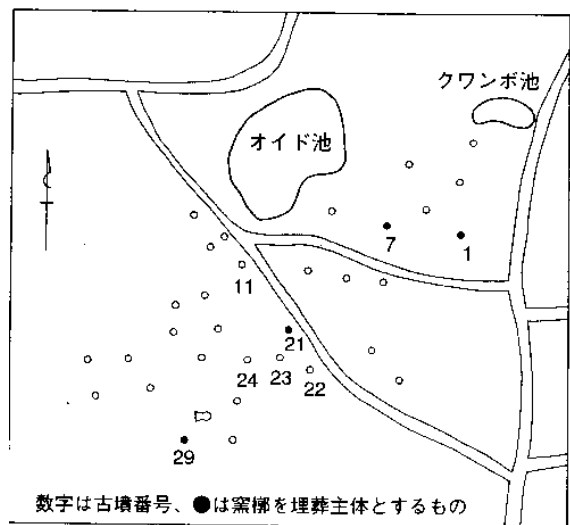


図1 陶器千塚古墳群の分布 S=1/12000  
(森1950より再トレース)

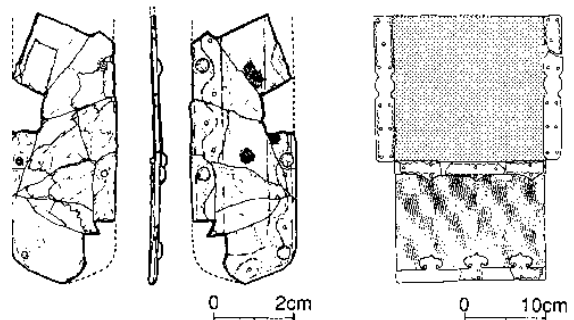


図2 胡籬金具実測図(陶器千塚11号墳):左  
胡籬の復元図(珠城山1号墳):右  
(復元図は坂1992より転載)

遺物が陶器千塚古墳群より出土したという点が興味深い。この古墳群は従来より須恵器工人集団の残したものと考えられてきた。その理由は、窯槨（木芯粘土室）や須恵器棺を埋葬主体とするものがこの古墳群に多く存在するからである。窯槨とは、柱材で骨組みを組んだ後、粘土で被覆し、玄室を作り出すものあり、構造上は横穴式石室に類似する。近畿、東海地域に多くみられ、後期後半の時期に限定される墓制である。特に陶器千塚 21 号墳（カマド塚）では、窯槨内に火葬された人骨が 2 体発見されている。この墓制はかつて森氏が述べたように、須恵器窯の発想から生まれたものとするのが妥当であり、その被葬者もまた、須恵器生産にかかわった人物とみてよいだろう。ところが、胡籛のような武具に付属する金銅製飾金具は、これまで須恵器生産集団の所産とされる古墳から出土した例がなく、その意味では異例の副葬品といってよい。いったい 11 号墳の被葬者はどのような人物であったのか。11 号墳の埋葬主体は不明であるが、先述のように後期後半とすることができる。様相の判明している 7 基のうち、1・7・21・24・29 号墳（24 号墳以外は窯槨）は後期後半としてよい。この後期後半というのは、陶器川を隔てた南側に、陶器南遺跡などの須恵器集積場と考えられている集落遺跡が出現する時期であり、両者とも終末期に入ると断絶する。この古墳・遺跡群の様相から、旧来の在地勢力とは異なる集団が新たにこの地に移住し、短期間の活動を行なった後、別の地へと移住していった、という状況を想定することができる。また、この古墳群の被葬者たちのなかに、胡籛という特殊な副葬品（すなわち武具）を有する人物がいたことも、上記のような想定に関連するものと考えられる。というのは、11 号墳の被葬者と胡籛金具は、この新たな移住集団の性格を考えるのみならず、湯山古墳の出現を考えるうえでも重要なキーワードとなるからである。湯山古墳は当地域で唯一の、横穴式石室を有する小型の前方後円墳で、後期後半に位置づけられる。また雲母片を埋葬に用いるという、同時期の韓国の慶州地域で盛行する葬法を採用しており、やはり同様の葬法をもつ三輪山麓の珠城山古墳群とも関係が深い。陶器千塚古墳群、集落遺跡の造営と、この時期にこの地域で起こった何らかの事象を、これらの複合的検討から考える必要があるだろう。以上のように、工人集団の活発な活動から古墳時代社会を考える、あるいは遺物のみではわからない事象を、遺跡群の連動的把握という方法から考える、という二つの視点は、従来より前方後円墳に傾倒しがちであった古墳時代社会の復元図を修正してゆくために欠かせないものであり、また、群集墳とはなにかという問いに対する一つの解決策としても有効である。拙稿の作成にあたり、当時の貴重な記録等の閲覧を許可していただいた森浩一先生に、記して感謝申し上げます。

## 参考文献

- [1] 柴田稔 1983 「横穴式木芯粘土室の基礎研究」『考古学雑誌』第 68 巻第 4 号
- [2] 伊達宗泰・小島俊次 1956 『大和國磯城郡大三輪町穴師 珠城山古墳』奈良縣教育委員會
- [3] 坂靖 1992 「胡籛の系譜」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズ
- [4] 樋口吉文 1999 「茅渟県陶邑の最近の考古学成果から」『堺市博物館報』第 18 号
- [5] 森浩一 1950 『陶器千塚見学ノート』
- [6] 森浩一 1956 「大阪府泉北郡陶器千塚」『日本考古学年報 9』
- [7] 森浩一 1967 「葬法の変遷よりみた古墳の終末」『末永先生古希記念 古代学論叢』
- [8] 門田誠一 1999 「古墳出土の雲母片に関する基礎的考察 東アジアにおける相關的理解と道教思想の残映」『鷹陵史学』第 25 号